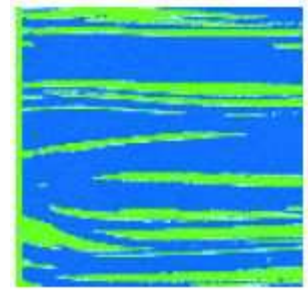


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2015年 夏号 No. 79 (2015年10月13日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

新しい理事会の構成と狙い	坂上 貴之
『行動分析学研究』編集長就任にあたって	中島 定彦
日本行動分析学会第33回年次大会を開催して	竹内 康二
京都ABAI体験記(1):「報告言語行動についての報告言語行動」の報告	雨貝 太郎
京都ABAI体験記(2):日本での国際会議に参加して	岩本 佳世
京都ABAI体験記(3):ABAI第8回国際会議に参加して	遠藤 美行
京都ABAI体験記(4):文化差が生み出す新しい学会の視点	佐々木銀河
京都ABAI体験記(5):ABAI京都国際会議に参加して	趙 成河
京都ABAI体験記(6):ABAI国際会議への参加を通して	中村 敏
京都ABAI体験記(7):ABAI体験記～3日間の京都駅チカ留学～	吹田 光
京都ABAI体験記(8):失敗からはじめる国際学会膝栗毛	福田 実奈
2016年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成時事業」	渉外委員会
編集後記	ニューズレター編集部

新しい理事会の構成と狙い

坂上貴之(慶應義塾大学)

前のニューズレターで、新しい理事会がスタートすることをご報告いたしました。どんな構成で、どういう狙いがあるかについて、ここでご説明したいと思います。

今度の理事会には6つの委員会がありますが、大きく分けると2つのまとまりでできています。1つは、行動分析学会の新しい活動を生み出す機能を持った、編集、企画、渉外の各委員会で

す。もう1つは、行動分析学会の維持や運営の機能を担った、財務、法務、総務の各委員会です。

編集委員会は学会誌の編集と発行、並びに以前は出版企画委員会が担当していた学会による出版物の企画・編集・発行に関わる業務を担当します。

企画委員会は従来の研究教育推進委員会、社

会貢献委員会、年次大会支援委員会が担っていた、主に大会に関わる企画や開催支援の業務を引き継ぎます。ただし、これまで研究教育推進委員会が行っていた助成事業と学会賞のうちの実践賞の選定は財務委員会の担当となります。

渉外委員会は国際委員会と広報委員会の仕事を引き継ぎ、海外との交流や会員間の交流、また国内・国外の諸学会との交流をその主たる業務といたします。さらに、最近大きな問題となりつつある資格問題についても担当いたします。

財務委員会は新しい委員会ですが、学会の予算、決算、出納管理、財務状況の管理と展望を主たる業務とし、助成と実践賞選定については研究教育推進委員会を引き継ぐことといたします。

法務委員会も新しい委員会です。この委員会は社団法人化に伴い、定款・細則や諸規程の制定、見直し、提案と、倫理と選挙関連の問題を取り扱うのが主要な業務です。

総務委員会はこれまでの学会事務局に相当する業務を担当いたします。議案と議事録の作成、会員管理、また実務を担当するリファレンスと

の連携業務が中心となります。

各委員会には主査と副査の2名の担当理事がつき、業務を分担して円滑に推進できる体制を取っております。担当者については、学会ホームページをご覧ください(<http://www.j-aba.jp/aboutus/official.html>)。

以上の他に、役職として、各委員会の取りまとめと事務執行を指示する、理事長ほか、副理事長(兼日本心理学諸学会連合への学会代表)、事務局長の3役、また委員会の業務や理事会運営、決算を監査する監事3名がおります。

本学会も今年度には1000名を超える会員数となり、法人化を機に一層多くの方が参加する学会へと成長していく感があります。その期待に応えるためにも、法人化に伴って発生してきた、また今後発生する様々な問題を解決していく必要があります。今期は、そうした意味で、社団法人としての学会運営への順調な移行を第1に心掛けたいと考えており、こうした新しい組織体制の中で、少しずつではありますが、確実な業務の遂行を目指してまいります。皆様のお力添えを切にお願い申し上げます。

『行動分析学研究』編集長就任にあたって

中島定彦（関西学院大学）

機関誌『行動分析学研究』の編集長を2年間務めさせていただくことになりました。これまでの編集長である佐藤方哉先生（初代）、出口光先生（第2、3代）、河嶋孝先生（第4代）、中野良顯先生（第5代）、小野浩一先生（第6代）、藤健一先生（第7代）、藤原義博先生（第8代）、眞邊一近先生（第9、10代）、島宗理先生（第11代）、森山哲美先生（第12代）が築いてこられた『行動分析学研究』のよき伝統を引き継ぎたいと考えています。四半世紀前、私は佐藤方

哉先生の研究室の大学院生として、寺田雅英さん（故人）とともに学会の事務局員を務めており、編集実務を第3巻～第6巻第2号まで担当いたしました。当時と比べて、さまざまな点で隔世の感があり、まだ戸惑っている状況ではありますが、皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

『行動分析学研究』第29巻別冊の学会創立30年記念特集号には、これまで編集長を務められた先生方のインタビュー記事が開催されてお

り、ほぼすべての先生が、原稿集めに苦勞した旨のお話をされています。幸い、森山前編集長より引き継いだ論文原稿が数篇あり、6月の引継以降も4篇の新規投稿（平均月1篇）をいただいています。今後も多くの論文の投稿を期待しています。また、『行動分析学研究』では生産的で教育的な査読を行なう伝統がありますので、多事に多忙を極める先生方から親切丁寧な査読を行っていただいています。編集長としてこの良き伝統は守っていきたいと考えておりますが、投稿者の方には事前に十分な推敲をお願いいたします。

さて、法人化後初の学会体制では、従来の機関誌編集委員会と出版企画委員会が「編集委員会」として統合されました。したがって、編集委員会内部に機関誌編集と出版企画を担当する部局を抱えることとなりますので、そのそれぞれについて、簡単に方針を述べたいと思います。

まず、機関誌編集ですが、上述のように編集は現時点では（編集長が不慣れな点を除き）順調です。編集長の未熟を補うために、武藤崇先生（同志社大学）に副編集長をお願いしました。また、過去3代の編集長である島宗理先生（法政大学）、眞邊一近先生（日本大学）、森山哲美

先生（常磐大学）に編集顧問としてご助言いただくことになりました。編集委員は28名の方々をお願いしましたが、うち石井拓先生（和歌山県立医科大学）、大河内浩人先生（大阪教育大学）、石川健介先生（金沢工業大学）、野呂文行先生（筑波大学）、霜田浩信先生（群馬大学）の5名には常任編集委員として、編集執行部に入らせていただきました。国立情報学研究所(NII)の電子図書館事業終了に伴い、機関誌ならびに年次大会発表論文集データの移行が必須となったことなど、課題が山積しておりますが、これらの先生方および会員の皆様のご協力のもと、学会のより良き発展のために尽力したいと考えております。

出版企画については、副編集長の武藤崇先生に責任者をお願いいたしました。すでに、シングルケースデザインの教科書と専門書を刊行するという方針が立てられ、執筆候補者への依頼が始まっております。このほかにも、市場出版が困難な専門書の出版助成の検討などいくつかのアイデアが提案されています。会員の皆様には、書籍の出版企画についてもご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

日本行動分析学会第33回年次大会を開催して

竹内康二（明星大学）

2015年8月29日・30日に、明星大学において第33回年次大会を開催しました。大会参加者は383名でした。天候があまり良くなかったのにもかかわらず、多くの方にご参加いただきありがとうございました。また、参加者および研究発表者の方々には積極的なご協力をいただきました。心よりお礼を申し上げます。なにかとご不便やご迷惑をおかけしたと思いますが、無事終

了できましたことに、感謝申し上げます。

例年に倣い開催の経緯をお話しますと、最初の打診は2013年3月に山本淳一先生からでした。そこで、当時明星大学の教授であった小美野喬先生（現名誉教授）にご相談をしたところ、「行動分析学において明星大学が担ってきた役割を考えると、引き受けるのが大前提。ただし、開催の時に私（小美野先生）は定年退職している

ので、大会委員長はあなた（竹内）がやった方が良い」とお返事をいただきました。若輩の私が大会委員長というのは勇気のいる決断でしたが、明星大学で常勤や非常勤として勤務している学会員のスタッフからも協力の意向をいただけたので、引き受けることにしました。明星大学のスタッフには学会員が多く、最終的に準備委員会を構成した9名全員が明星大学で授業を担当する学会員でした。これだけのマンパワーがあったので、何事もなく開催できたのだと確信しています。準備委員会発足後は、大会の支援担当であった中島定彦先生に相談しながら準備を進めて行きました。中島先生にメールで質問をすると、いつも即座に丁寧にお返事をいただけたので、スムーズな準備ができました。ありがとうございます。また、準備の際にとっても参考になったのが、第31回年次大会委員長の平澤典子先生と、第32回年次大会委員長の平岡恭一先生からいただいた引き継ぎ資料でした。この資料がなければ、数十倍の大変さだったと思います。ありがとうございました。

研究発表（ポスター）につきましては、最終的に92件の発表が行われました。発表の形式に

は、いくつかの試みを盛り込みました。ポスター発表者の在席時間がシンポジウムと並行しないようにするため、奇数番号と偶数番号の在席時間を分けずに行いました。これを実現するためにポスターとポスターの間を広く空けて、隣同士で発表する場所が窮屈にならないようにしました。また、基礎と応用の研究者間で交流が生まれるように、ポスターの順番は発表者名の漢字コード順とし、内容による分類をしませんでした。お気づきになられたでしょうか。

大会準備委員の企画としましては、若手研究者の発表をできるだけ多くするため、講演でなく、シンポジウムを2件行いました。若手研究者の疑問や今後の展望を発表できる場になればと思つてのことです。

会員集会では、名誉会員の受賞式や、論文賞と実践賞の受賞式があり、会員の皆さまの今後の研究活動の励みになったものと思います。受賞された先生方おめでとうございます。

最後に、明星大学でこのような大会をさせていただきましたことに、スタッフを代表して、御礼申し上げます。ありがとうございました。

<京都ABAI体験記（1）>

「報告言語行動についての報告言語行動」の報告

雨貝太郎

（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

「10000000回に1回生起する」。行動分析家にとって、このような生起頻度の低い結果事象を過剰に意識することは、とてもおかしいことかもしれません。しかし、面白いことに自分も含め、この結果事象を意識して過剰に脅えている行動分析家が一定の割合で存在しています。

「飛行機が墜落することに対する極度の不安」を感じる私たちにとって、新幹線で行ける場所で、ABAIが開催されるのは、まさに吉報でした。参加にあたり日本行動分析学会より助成をいただき、誠にありがとうございました。京都の町は、観光客も含め、海外の人で溢れていて、

今いる場所があたかも日本でないかのような錯覚を覚えるほどでした。

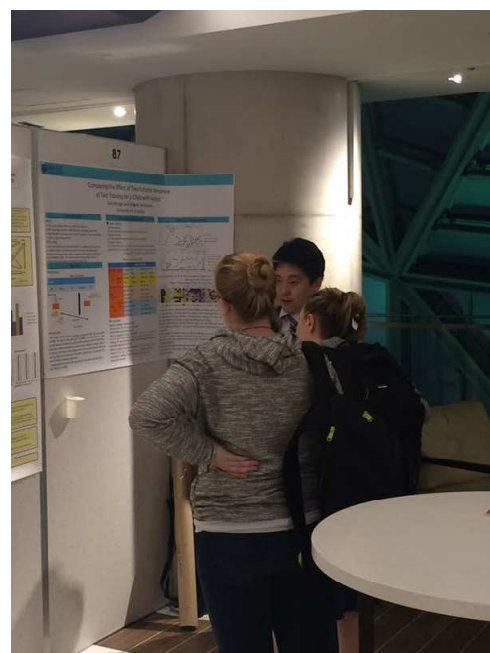
シンポジウムでは、PECS が世界で広く用いられている実情と課題や、コンサルテーションの視点や好ましい実施方法などについて学びました。自分の専門分野である言語行動については、少なかったものの、アジアや欧米での研究状況を知ることができました。それぞれ、同じ言語行動でも観点や研究方法が異なる点に驚かされました。テーマにより聴講者の人数も様々で、ふと興味をもって入ったとあるシンポジウムには9人しか聴講者がいませんでした。題目は伏せますが、聞いていると非常に参考になる新しい観点を得ることができました。トレンドや人気に流されずに、研究を続けることの重要性に気付かされた気がしました。

学会中最も衝撃を受けたのが、シンポジウムの間にある「Coffee Break」でした。休憩時間と表記すればいいのに最初は思っていたのですが、実際にコーヒーや菓子類がたくさん出てきました。そして、参加者たちがコーヒーを片手にあちこちで雑談をしていたのです。旧交を温めるだけでなく、このような機会を通して様々な人と関わりを持つのだと驚きました。恥ずかしがって、ためらって日本人だけで固まってしまい、一度お話しをしたかった先生方に話しかけられなかったのが、少し後悔です。

2日目の夜、ポスター会場に行くと、国内学会のポスター会場とは異なる空気が流れていました。Coffee Breakと同様で、みな、和気あいあいと論議を交わしていました。その一方で、自分は英語で説明できるか不安と闘いながらポスターの前に立っていました。知り合いを含めて多くの日本人が発表を聞きに来てくれました。日本語で話せることがこんなにも楽なことなのかと感動しつつ、これまで考えもしなかった新しい知見を得ることができました。また、海外の方にも聞きに来ていただけました。つたない

英語で必死に説明をし、「ああ、なるほど」と言っていたのが鮮明に記憶に残っています。一方で、必死になりすぎて、何を聞かれたのかを詳細を覚えていないのが残念です。今後、英語力をもっとつけて、気持ちに余裕をもって受け応えられるようにならないといけないと強く感じました。

さて、学会で出会ったある方に冒頭に述べた飛行機墜落不安の話をする、その方は真面目な顔でこう言われました。「ABAI 国際会議が日本で開催されて喜んでいるようではダメだ。君が素晴らしい研究発表を繰り返して、ABAIから『ぜひとも日本で年次大会を開催させてほしい』と言わせるようにしないとイケない」と。字義通りの意味ではなく、「毎回、年次大会に参加して発表しなさい」という意味だと思っています。日本行動分析学会でとある先生が「タクトが足りない（自分の研究を学会で発表する人が少ない）」と仰っていましたが、曲がりなりにもタクトの研究をしている1人として、これからもっと積極的にタクトを生起させなければいけないと強く感じさせられました。ありがとうございました。



<京都ABAI体験記(2)>

日本での国際会議に参加して

岩本佳世

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

日本行動分析学会から学生会員の参加に対する助成を拝受し、2015年9月27日から29日までABAI第8回国際会議(京都)に参加してきました。参加者の60~70%が海外からお越しの方々だったようです。日本にいながら米国での会議や学会に来ているような不思議な感覚で過ごしていました。

レセプションではこれまでに行動分析学にご尽力くださった方々をご紹介されました。舞妓さんや芸妓さんが興を添えてくださり、彩鮮やかで美味しい京料理や日本酒が振る舞われました。随所に主催者側のおもてなしの心を感じました。国内外の参加者の皆さまは笑顔いっぱいとても喜んでいた様子でした。

ポスターは全137件で13のセクションに分かれており、最も多かったのがAUT (Autism)のセクションの発表37件で全体の4分の1を占めていました(プログラム上の数です)。私はEDC (Education)のセクションでの発表でした。



私が発表させていただいた研究は博士論文のテーマである発達障害児の在籍する通常学級における相互依存型集団随伴性の適用に関するものです。スクールワイドPBSや集団随伴性に関心のある方々が聞きに来てくださいました。年次大会と異なる点は、質問に来てくださった方が実践家の方よりも研究者の方が多かったことです。質問は集団随伴性の手続きに関する詳細な部分や副次的効果、社会的妥当性などについて受け、データの示し方や介入時期についてのアドバイスをいただきました。応用研究だけではなく、基礎研究の方々からもご助言をいただけることは大変貴重な機会だと思っています。国際会議で研究発表ができるまでご指導してくださいました野呂文行教授に感謝しています。研究デザインにご助言してくださいました園山繁樹教授、大六一志教授にも感謝しています。そして、研究にご協力してくださいました小学校の先生方や子どもたち、ありがとうございました。

シンポジウム等は同じ時間に複数のセクションの発表があり、午前中の30分間はコーヒープレイク、お昼過ぎはランチタイムとして発表なし・素敵なお茶菓子や京都のお弁当ありの時間が設定されていました。その時に参加者の方々とシンポジウムの情報交換や日頃の研究生活についての話題で交流することができ、それもまた楽しい時間でした。昼食後に少し京都観光もできました。秋晴れの中、風情ある街並みを眺めながらバスで移動して散策してきました。

さまざまな魅力あふれるシンポジウムの中から、私が最も感銘を受けた招待シンポジウムを

ご紹介いたします。“Improving Education in Every Classroom: Right Here, Right Now (すべての教室 教育改革 いまここで)”というタイトルで William Heward 教授、Janet Twyman 博士、島宗理教授のご発表でした。Schools are failing to meet the needs of “gifted and talented” students, allowing them to fall far below their potential (Finn & Wright, 2015) という言葉が胸に響きました。(今も現場の先生方はたくさん努力されているけれど) 学校は幼児児童生徒のニーズを満たし、彼らの潜在能力を開花させるための (エビデンスに基づいた効果的な) より良い支援を提供していく必要があることを強く感じました。エビデンスに基づく 46 の支援技法 (Embry & Biglan, 2008) の中から “CHORAL RESPONDING (コーラル・レスポnding)” という個々の質問・問題・項目を教師が出し、子どもたちに声をそろえて音声で反応させる手法が紹介されました (Heward & Wood, 2015)。対象者は定型発達児と発達障害児で、学級全体でも小グループでも適用可能とのことでした。効果については size of effect だけではなく speed of effect についても報告されていました。Low-Tech の支援技法の後に Technology tools を紹介していただき、

実際にそのアプリを体験させていただきました。聴衆の方々も発表者の先生方もとても楽しそうでした。今、日本でも通常学級での学級全児童に対する支援と個別的な支援において Technology tools の活用も重要な支援方法のひとつとして注目されています。Low-Tech の支援技法と Technology tools の組み合わせ、研究と仕事に良い刺激をいただきました。

ポスターやシンポジウムでスタンダードな研究手法を体感することや新しい情報を得ることも重要ですが、実際に論文の著者に直接お会いできたり志高い方々と交流できたりすることで研究への動機づけを高められることが国際会議・学会に参加する醍醐味なのだと私は思います。3 年前の学会でシンポジウムの内容を質問したところ、すごく丁寧にご対応くださった教授にもお会いすることができてうれしかったです。本国際会議の開催に至るまでも開催期間中も企画・運営にお力を注いでくださった日本行動分析学会の方々、ABAI 事務局の方々、ボランティアとして活躍してくださった方々、皆さまに心より感謝いたします。日本行動分析学会より助成をいただきましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

<京都ABAI体験記 (3)>

ABAI 第8回国際会議に参加して

遠藤美行

(同志社大学大学院心理学研究科)

この度、2015 年度日本在住学生会員の ABAI 第8回国際会議参加に対する助成を頂き、誠にありがとうございました。上記の学会での体験を報告させていただきます。

今年の大会は私が所属する同志社大学があります京都府京都市で開催されました。千年以上の歴史を誇る京都には、皆様ご存じのとおり、今もさまざまな伝統文化が息づいています。会

場のホテルグランビア京都付近にあります京都タワーの展望台に上りますと、歴史豊かな京都の町を一望できます。大会前日の懇親会では、京都祇園の舞妓さんのパフォーマンスがあり、私たち観客の目を楽しませてくれました。

私は”The relationship between delay discounting and actual study behavior in university”という演題でポスター発表をさせていただきました。日本の先生方や大学院生、海外の先生方や学生の方々が発表を聞きに来てくださいました。基礎系から臨床系までの幅広い分野の先生方に貴重な意見を頂くことができました。自分では気が付くことができない分析の視点や結果の解釈など多くをうかがうことができ、大変勉強になりました。海外の先生方は、私のつたない英語の発表にも熱心に耳を傾けてくださいました。ディスカッションの場面では英語の受け答えに苦労したこともありましたが、自分なりに最善を尽くし、なんとか自分の考えを伝えました。次の国際学会までには英語によるコミュニケーションをより円滑に行えるようにしたいです。自身の発表時間外には、他の先生方のポスター発表やシンポジウムを見に行きました。さまざまな国の研究者の研究とふれあい、自分の見識を広めることができました。

閉会式の際に、日本からは坂上貴之先生と杉山尚子先生が話されました。その中で、日本行

動分析学会の設立・発展に寄与された故佐藤方哉先生の紹介をされました。日本において脈々と受け継がれる行動分析学の歴史を知ることができ、非常に感銘を受けました。杉山先生のお話が終わった際には、会場ではスタンディングオベーションが起こりました。

今回の ABAI 参加を通じて、非常に多くのことを知り、経験したと同時に、一方で自身の研究者としての未熟さを改めて痛感しました。ここで得たものを糧に今後も研究に精進したいと考えています。ありがとうございました。



< 京都ABAI体験記 (4) >

文化差が生み出す新しい学会の視点

佐々木 銀河

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

私は 2014 年、2015 年の ABAI 年次大会に参加して、国際学会は京都で 3 回目となりました。

特に今回は初めての日本開催ということもあり、どのような大会になるか非常に楽しく思って参

加させていただきました。

学会のプログラムでは、私の博士論文のテーマが「児童福祉施設における組織行動マネジメント (OBM)」ということもあり、OBMに関する講演を中心に聞きました。特に印象に残ったのは「A Conversation about OBM research and practice in Japan and Korea」というテーマでした。このディスカッションの中では、日本における OBM に関する研究・実践が諸外国に比べて進んでいないという事実を改めて認識する機会となりました。このように日本だけでなく他国の研究・実践を聞くことができるのは国際学会ならではと思われました。特に OBM のような研究領域は日本の学会では発表自体を聞く機会が少ないため、とても貴重な機会となりました。

2 日目の最後のプログラムには、ポスター発表がありました。今回のポスター発表では博士論文のテーマではなく、大学の教育相談で実施した「自閉スペクトラム症 (ASD) 児で言語賞賛を強化子として確立する際の刺激プリファレンスの影響」というテーマで発表をしました。研究の結果は「くすぐりなどの感覚-社会性強化子を食餌性強化子よりも好む ASD 児はそうでない ASD 児よりも言語賞賛を強化子として機能化させやすい」と説明すると、日本人も外国人も面白いと言って頂けたことは大変嬉しかったです。

しかし、ここに至るまでに1つ困ったことがありました。それはポスターのパネルサイズです。日本の学会では基本的に縦長のパネルで A0 用紙1枚や A4 をペタペタするタイプが多いのですが、ABAI 年次大会ではパネルサイズが大きく、横長のポスターで発表する人も多いのです。その勢いが余って今回も横長で作ってしまいました。ですが、ここは日本です。縦長文化です。案の定、用意したポスターがパネルに合わずに困ってしまいました。結局、私はタイトルや本文をハサミで切って貼り合わせることでなんとか縦長パネルに収めました。しかしながら、外

国人はそんなことはしません。堂々とパネルからはみ出したり、早いもの勝ちで貼ってしまったりです。つまり、日本人が既存の環境 (パネルの中に) に合わせて自分の行動を調整するのに対して (切って貼る)、外国人は既存の環境自体を変えて (パネルをはみ出して)、自分の行動は変えないのです (いつも通り貼る)。学会発表における文化差の一端を感じたエピソードとなりました。

さて、ポスター発表の内容に戻ります。私は後半の時間に在席していたのですが、外国人よりも日本人が見に来ることが多い印象でした。しかしながら、そこは行動分析学の学会ですので印象ではなくデータをちゃんと取って判断したいと考えます。発表の際に英語と日本語のハンドアウトを両方用意しておき、どちらが多く取られるかを分析してみました。結果、英語が 52%・日本語 48%とハンドアウトを取った割合はほぼ半々で、むしろ英語の方が若干多い状態でした。その時、自分の印象とデータの違いはどうして生まれるのだろうか? と考えながら立っていると1つの結論に至りました。ああ、なるほど、最初の1時間でさらっとポスターを見て、いち早く京都の街に繰り出したのだと。気づいたら、同じ在席時間であるはずの向かいの外国人もいない。まさに **Freedom** です。

このように、今回の京都 ABAI は色々な文化差を改めて感じた学会となりました。何よりも初めての日本開催という貴重な機会に、参加費の助成を受けられる学生の立場で参加できる幸せを感じました。まだまだ英語の壁は大きく立ちふさがっていますが、今回の学会で基本的に1つの解決方法しかないと悟りました。それは、英語を聞く・話す・読む・書く行動の試行数が何よりも重要ということです。そのために、国際学会への参加・海外誌への投稿を積極的に進めて、諸外国の研究者・実践家の方に日本の研究・実践を発信していきたいと強く感じた3日間となりました。

< 京都ABAI体験記 (5) >

ABAI 京都国際会議に参加して

趙 成河

(筑波大学人間総合科学研究科)

この度、2015年度ABAI国際会議の参加に対する助成をいただき、誠にありがとうございました。京都で開かれた第8回国際会議の報告をします。

ABAIの国際会議は、2年に1回、世界各地で開かれる大会です。毎年、アメリカで開かれる年次大会に比べ、規模は小さいですが、その分、海外の行動分析家と密なコミュニケーションができ、連携を結べる機会があると思います。

今年の第8回の大会は日本の京都で開かれました。私はアメリカで開かれた年次大会には参加したことがありますが、国際会議は初めてで、しかも日本で開かれる大会だったので、とても楽しみにしていました。

ABAIの公式言語は英語ですが、今回、日本語のチュートリアルに通訳がありましたので、海外の研究者とのより活発な交流ができたと思います。夜のレセプションでは、日本の伝統的なパフォーマンスを見ることができ、年次大会とは違う国際会議ならではの雰囲気も感じられました。

私は自閉症スペクトラム障害児における偏食問題について研究をしているので、関連するテーマのシンポジウムがあれば参加する予定でしたが、今回の国際会議では同じテーマに関するシンポジウムがなかったので、その代わりに、近年、偏食に関する研究の中でよく用いられるTele-Healthに関するシンポジウムに参加しました。以前、アメリカの研究機関に訪問した時、偏食を示すお子さんを対象とし、Tele-Healthを用いて家庭場面において母親による介入を行

う場面を見学したことがありました。Tele-Healthは遠隔医療と訳されますが、最近では医療フィールドのみではなく、様々な研究フィールドで用いられているようです。アメリカの場合、クライアントとサービス提供機関との距離が遠い場合、地域の壁を乗り越えて、ウェブカメラを通して専門家が保護者との面談および対象児の観察をし、リアルタイムで介入を行うことが増えているそうです。専門家が観察した上、介入手続きを立て、リアルタイムで介入を行うので、保護者による実行に関する高いフィデリティが保障されることはメリットの一つだそうです。シンポジウムを聞いて、今後、Tele-Healthを用いた保護者による偏食問題への介入を行いたいと思いました。

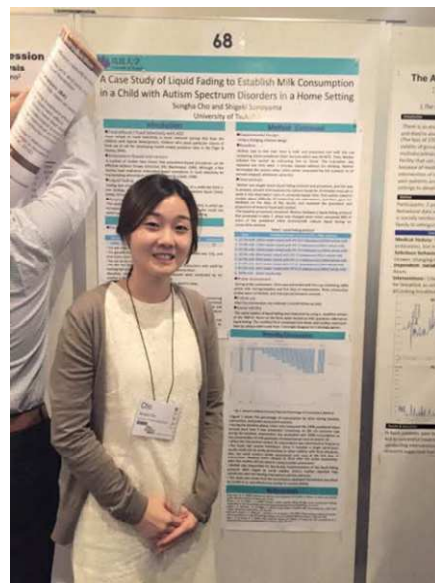
私のポスターセッションでは、「A Case Study of Liquid Fading to Establish Milk Consumption in a Child with Autism Spectrum Disorders in a Home Setting」という題目で発表をしました。本研究では、まだフォローアップミルクを飲んでいて偏食を示す7歳の自閉症スペクトラム障害児を対象とし、刺激フェイディング（飲物フェイディング）を用いて100%牛乳の飲食を確立させることを目的としました。介入手続きおよびフェイディングプロトコルは第一著者が設定し、すべてのセッションは家庭場面において母親により実行されました。その結果、8ステップのプロトコルを経て、100%牛乳の飲食は確立され、1カ月後のフォローアップでも維持されました。また、研究終了後、手続きに関する社会的受容性は高

く示されました。

日本では同じテーマを研究される方が少ないと思いますが、今回の国際会議に参加した海外の研究者の中に同じテーマの研究者が数人いました。海外の研究者および特別支援学校の先生から介入手続きに関する質問に受け答えることは、改めて自分の研究について振り返る機会になりました。教育現場の先生から同じ手続きで実践してみたいという感想や結果に対する賞讃も聞けたので、嬉しかったです。今回、いただいたコメントを、今後の研究に生かしたいと思っています。

次回の第9回の大会はフランスだそうです。また機会があれば、2年後のフランス国際会議

にも参加したいと思います。ありがとうございました。



<京都ABAI体験記(6)>

ABAI 国際会議への参加を通して

中村 敏

(大阪教育大学教育学研究科)

2015年9月27日から29日にかけて、国際行動分析学会 (Association for Behavior Analysis International; ABAI) の第8回国際会議が日本の京都で開催されました。ABAIの国際会議が日本で開催されるのは初めてのことであり、私にとっても初めての国際的な大会への参加となりました。

当日は、各会場で様々なトピックのシンポジウムや発表が行われました。国内の学会では、各シンポジウムには2時間の時間が設けられていることが多いと思われそうですが、今大会では多くのシンポジウムは50分で区切られていました。そのため、いつもより数多くのシンポジウムが行われている気分になり、目移りしてしまうほどでした。私は英語にはあまり自信がない

ため、発表は正直なところ内容を追うのがやっとのところでした。しかし、未熟ながらも理解した内容は、どの発表も大変魅力的なものばかりでした。また、論文等で文字だけで認識していた研究者の方の発表を目の前で聞いたことは、非常に貴重な体験でした。私にとっては、特に Linda Hayes 先生と Mark Galizio 先生の講演は心が躍るものでした。若手の方の中には、発表後にそうした憧れの研究者と直接交流をしていた方も見かけられました。こうした体験ができることは、国際的な大会に参加する大きな利点のひとつなのではないかと思われま

す。些細なことかもしれませんが、国内の大会と異なる点として驚いたことは、coffee brake としてシンポジウム間の休憩の際にコーヒーと茶

菓子が振舞われたことでした。これは、開催場所がホテルであったことが関係しているのかもしれませんが、普段とは異なる点であり、印象に残っている点です。連続の傾聴で脳の様々な領域を酷使していたため、このような break time は非常にありがたかったです。

ポスター発表は、18時半から20時半までの時間に設定されていました。国際的な大会ではこのような遅い時間帯の設定であることが多いと聞きますが、国内の大会にしか参加したことがない私にとって、夕飯後の発表というのも初めての体験でした。当日は、ポスター発表前の最後のシンポジウムが終わる18時頃から、すでにポスターの前で議論が交わされている光景も見られました。幸運なことに、私もポスターを掲載した直後から多くの方がひっきりなしに私のポスターを見に来てくださり、休む暇がないほどでした。英語での発表はうまくいったとはお世辞にも言えないものであり、私の英語は聞き取りが難しいほど酷いものであったと思います。しかし、海外の研究者の方は、そのような私の拙い発表に耳を傾け、理解しようと歩み寄って下さる方ばかりでした。そして、時には賞賛や激励の言葉をかけていただいたりもしました。そのおかげで、発表前の緊張は在席中にはなくなっていました。反省点としては、やはり英語

が未熟であったことです。発表前から憂慮していたことですが、質問の内容の聞き取りやそれに対する返答は思うようにできませんでした。せっかく私の研究を聞いてくださったのに、その方が抱いた疑問を解消できないようでは、私の研究を十分に伝えることができたとは言い難いように思います。そのことは反省すべきであり、改善しなければいけない点であるように思います。

ABAI 国際会議での体験は非常に刺激的なものばかりでしたが、心残りの点も多くあります。特にひとつ挙げるとすれば、国内の参加者が多く参加していたため、海外の方より日本の方との交流の方が多かった点です。これは、自分は英語が不得意だという引け目から交流するのを躊躇していたことが原因なのだと思います。国際的な大会としてせっかくの機会だったため、もっと積極的に海外の方に話しかけていくべきだったと思います。

今回、私のような若輩に参加費助成をしていただき、ありがとうございました。次回の ABAI 国際会議は 2017 年にフランスの Lille University で開催されるそうです。今度は国外の開催であり、今回より参加するハードルは高いですが、次回も是非参加させていただきたいと思います。

< 京都 ABAI 体験記 (7) >

ABAI 体験記～3日間の京都駅チカ留学～

吹田 光

(法政大学人文科学研究科)

こんにちは、吹田光(ふきたひかる)です。現在私は法政大学人文科学研究科にて島宗理先生のお世話になっております。この度は2015年

度「日本在住学生会員の ABAI 第8回国際会議(京都)参加に対する助成事業」の助成をいただきありがとうございました。また、この体験

記を執筆する貴重な機会をいただき大変光栄に思います。重ねてお礼申し上げます。

京都で行われました ABAI には、わずか 3 日間で 550 人以上の参加者が世界中から集い、ポスター発表の数は欠番こそありましたが登録数は 137 件、企画の数は細分化されたポスターセッションやセレモニーを含めて 95 件でした。私はこの国際会議に二つの立場から参加させていただきました。一つはポスター発表を控えた学生参加者、もう一つは学会運営に関わるボランティアの立場です。この国際会議で体験しましたことをそれぞれの立場からご報告したいと思います。

まずは学生参加者の立場からの体験です。今回のポスター発表は、同じ研究室の唯一の同期である濱地航平君との連名にて臨みました。発表させていただいた研究は、私たちが大学院に進学し初めて自分たちで作上げたもので、私たちにとって非常に思い入れの強い研究でした。その研究が国際学会という大きなイベントを介して日の目を見ることが決まったときは感激しました。内容と関係はありませんが、そこでポスター発表の番号が 1 番であったことが強く記憶に残っています。日本語ですら難しい研究発表を英語で行うのは非常にハードルが高かったです。とはいえポスター発表はポスター発表、ポスター内容や周囲から聞こえてくる言語が全て英語であること以外日本の学会との相違はほとんどありませんでした。他の参加者の方のポスターを見させていただき、解説もしていただいたのですが、その方法として研究の概略だけ口頭で説明し、それ以降は確認的な質問や発展的な議論をする時間に費やす形式を取っている方がいました。私はまだまだ学会参加の経験が浅いため、発表方法を考え、構成する上で非常に参考になりました。学会は人の研究を知ると同時に、発表の仕方や研究の売り出し方を学ぶ場としての機能も持っていることを改めて実感しました。発表時間外でも懇親会、コーヒープ

レイク、ランチタイムなど交流する時間が多く設けられており、その時間中はどこの国から来たのか、観光には行ったのか、第一言語はなにかなど他愛もない話を楽しみました。しかし気がつけば研究の話になっており、自分の研究のテーマは何なのか、なぜそのテーマに興味を持ったのかなど、海外にはどのような研究者がいるのかを知る良い機会になりました。

次はボランティアの立場からのご報告をさせていただきます。一スタッフとして働かせていただいたため、学会参加者から話しかけられることが必然的に増え、英語に触れる機会が多かったです。仕事をしていく中で、時々海外の方から日本語で「ありがとう」と言われることがあり、嬉しいと感じつつも英語で「my pleasure」と返すべきか、日本語で「どういたしまして」と返すべきか迷い、結局無言で微笑みかけて終わることが何度かありました。もしボランティアとして参加していなければ海外の方とコミュニケーションを取る機会の多くを逃していたことでしょう。他のボランティアの方とも知り合うことができ、このボランティアは今回の学会参加をより充実したものにしてくれたかと思えます。

最後に、学会参加の準備をする過程で細かく内容をチェックしていただいた指導教員の島宗先生、英語による発表をご指導くださった Jun 先生にこの場をお借りしてお礼申し上げます。筆を置かせていただきます。ありがとうございました。

<京都ABAI体験記(8)>

失敗からはじめる国際学会膝栗毛

福田実奈

(同志社大学大学院心理学研究科)

博士後期課程1年の福田と申します。この度はABAI第8回国際会議での発表に対し参加費の助成を頂きまして誠にありがとうございます。今回この大会が日本、しかも地元の京都で開かれると聞いてとても楽しみにしておりました。

国際学会に参加するのは2回目で、初めて参加した時(SQAB2014@Chicago)はガチガチに緊張していたことを今でも覚えています。今回も前回の例に漏れず緊張しており、受付にてlast nameを聞かれたのに緊張のあまりfirst nameを答えるという失態が今回の学会の始まりでした。

さて、1日目はチュートリアルでした。広いホール一杯に世界各地からの参加者が座っていて、本当に国際学会に来たのだなと実感しました。フロアからの質問も多く、熱い議論が交わされていました。その後のレセプションでは舞妓さんによる踊りが披露されました。生まれてこのかたずっと京都に住んでいながら舞妓さんを初めて見たのでとても貴重な体験となりました。

2日目朝一のセッションはなんと8時から。毎時間5~7個くらいのセッションが同時開催でしたので、どれに伺おうかととても迷いました。どのセッションも面白かったのですが、子供に野菜や果物を食べさせるために所謂食育をする試みを紹介したものが印象に残っております。発表では、野菜や果物を食べよう♪(大意)と歌った子供向けのビデオの紹介(日本で一時期流行った魚魚魚~魚を食べるとー♪を思い出しました)など映像が多用されており、英語の

聞き取りに難のある自分でも内容を理解することができました。

お待ちかねのポスター発表は夕方からでした。ポスターサイズは縦長の指定だったのですが、2.75 feet by 4 feetという規定を見て横長だと勘違いしており、当日パネルを見て本当に驚きました。ゼミ生全員横長で作ってしまっていたのですが、幸い地元京都での開催でしたので、お昼のうちに大学へ戻り縦長に直して事なきを得ました。さて肝心の発表ですが、来てくださったお客さんは私の拙い英語を辛抱強く聞いてくださりとてもありがたかったです。中には合間合間に「わかるわかる!」「そうなんだ!」(意識)と相槌を打って即時強化をしてくださる方もいらっしゃり、徐々に自信を持って拙い英語を発することができました。ただ、ゆっくりな英語はなんとか聞き取れるのですがネイティブレベルの速さの英語は中々聞き取れず、何



度も聞き返してしまいました。今度発表するときには、もっとちゃんと聞き取れるように、話せるように英語力を鍛えていきたいと思います。

前日のポスター発表が 21 時前までありましたが 3 日目も 8 時から！なんとか起きて朝一番のセッションに間に合いました。三日間英語漬け、国際学会を堪能しました。全てのセッションを終え会場を一步出ればそこはいつもの京都。

会場だったホテルグランヴィア京都は駅直結の建物ですので、これぞ駅前留学だなと思いました。

最後になりましたが、今回ボランティアスタッフとして 3 日間足が棒になるまで働いてくださった学生の皆さんに感謝を申し上げます。本当にお疲れ様でした。

2016年度

「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」

渉外委員会

日本行動分析学会では、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、毎年、ABAI や SQAB などの国際学会参加を助成する事業を行っています。2016 年度もこの事業を継続して実施します。

来年度の助成対象は 2016 年 5 月に米国シカゴで開催される ABAI 第 42 回年次大会または SQAB です。申請するためには、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムやパネルディスカッションのスピーカーのいずれかであること、また口頭発表、ポスター発表では第一発表者であることが条件です。その他の条件については学会 HP の募集要項をご確認下さい。

応募〆切は 2016 年 3 月 31 日（消印有効）です。学会 HP からダウンロードできる申請書に必要事項を記入し、その他の資料とあわせて、日本行動分析学会事務局まで郵送して下さい。

なお、ABAI でのポスター発表については、SABA も “Senior Student Presenter Grants” という助成事業を行っています。詳しくは、下記、SABA の HP をご覧下さい (<http://saba.abainternational.org/grants/senior-student-presenter-grant.aspx>)。

SABA の助成に申請する場合、発表申込みの〆切は口頭発表やシンポジウムなどと同様に、10 月 28 日が〆切になります。SABA の助成に申請しない場合、ポスター発表の申込み〆切は 1 月 7 日ですので、ABAI の参加申込みは参加費の早期割引のために早めに済ませ、発表申込みのための抄録作成にはその後で時間をかけることも可能です。

学生会員の皆さまの ABAI/SQAB への参加をお待ちしております。

<応募先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

学会 HP : <http://www.j-aba.jp/>

編集後記

今号より、一般社団法人に移行して新設された渉外委員会のニューズレター編集委員がJ-ABAニューズの編集を担当することになりました。これから2年間、4名の編集委員（久保尚也、古野 公紀、小原 健一郎、眞邊 一近（順不同、敬称略））が協同して出版に当たります。どうぞよろしくお祈いします。今号は、出版直前に開催された国際行動分析学会京都大会の参加記事を掲載することが出来、タイムリー

な出版になりました。今後も出来るだけその時々話題を掲載すると同時に、これまでの編集委員が手がけてきたトピックスの掲載も引き継いで行く予定です。会員の皆様に、少しでも楽しんでいただける内容にしていきたいと思っております。掲載記事についてご意見・ご要望がございましたら、気軽に編集委員までお寄せください。お待ちしております。 (KM)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25
日本大学大学院総合社会情報研究科
日本行動分析学会ニューズレター編集部
眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp